地方居住高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感

赤　澤　淳　子　・　水　上　喜美子

本研究の目的は，地方に位置する福井県における高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感の規定因について調査分析し，これまでの関東地区の高齢者に関する研究結果と比較検討することであった．その際，先行研究より調査対象者の基本属性（性別および年齢など）や家族構成，健康状態，経済状態，および対人関係を規定要因としてとり上げ，社会的ネットワークとして接触頻度（会う・連絡をとる頻度）を用いた．分析の結果，社会的ネットワークは，全ての高齢者において加齢とともに平均的に縮小するのではなく，むしろ加齢とともに変化する健康状態や社会経済的地位などの影響の方が大きいことが明らかになった．また，世帯構成の縮小化に伴い，同居家族以外の友達や近隣との人間関係は，必ずしも家族の代替機能を果たすほどには増加しないが，維持されていることが示唆された．特に，本研究の対象者においては，地域の特徴を反映し，友達や近隣の人々との交流頻度が高いことも明らかとなった．さらに，男性高齢者では，健康状態と家族以外との交際が，一方，女性高齢者では健康状態と経済状態が主観的幸福感に影響を与えることは，地域の如何を問わず共通していることがわかった．

キーワード：地方高齢者，社会的ネットワーク，主観的幸福感

Ⅰ．問題と目的

高齢化社会で問われるのは，定年後の人生をどのように過ごすことが幸福なのかという問題である．加齢は，若い頃の能力が衰えていく不幸と捉えられがちな風潮の中で，高齢者たちは，今まさに失われつつあるものをいかに受け入れていくのだろうか．

幸福な老いの測定に関する研究は，1940年代から今日に至るまで続けられており，生活満足度尺度やモラール・スケールなどの名称でよばれる各種の尺度が開発されてきた（古谷野，1996）．それらは，主として欧米において開発されたものであり，代表的なものとして，Lawton(1975)の主観的幸福感を測定するPGCモラール・スケール改訂版（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale）がある．17項目からなるこの尺度は高齢者を対象とし，心理的安定（Agitation），孤独感（Lonely dissatisfaction），老いに対する態度（Attitude toward）own agingの3因子構造となっている．モラールが高いということは，主観的幸福感が高いということであり，モラールが低いと，主観的幸福感が低いということになる（森岡，2000）．日本においても，モラール・スケールの適用可能性が認められ，老年学研究では頻繁に使用され，これに基づいて主観的幸福感の関連要因あるいは規定要因に関する様々な研究が行われている．

このPGCモラール・スケールを翻訳し日本の都心部の高齢者を対象とした調査研究を最初に

実施したのが前田ら（1979）である．分析の結果，健康（ADL），配偶者の有無，および活動の水準と主観的幸福感との間に高い正の相関が示され，アメリカでの研究成果とほぼ同様の結果が得られている．唯一異なるのは，日本では，現在地での居住年数が長い高齢者ほど，主観的幸福感が高いという点であった．

主観的幸福感の関連要因の中で，最も重要なものは，健康であるとされている．古谷野(1981)では，健康度自己評価がモラール得点と最も強い相関関係を示している．都心部の前期高齢者を対象とし，主観的幸福感の関連要因を性別ごとに分析した直井（1990）の研究でも，男女とも健康度が関連の高い要因であった．その他，欧米の主観的幸福感の関連要因の研究を文献検討した渡邉（2004）らも，健康感を最も重要な要因としてとり上げている．

同様に，対人関係や経済状態も主観的幸福感の規定因として挙げられている．対人関係については，関東地方の高齢者を対象とし，主観的幸福感の規定因を検討した結果，健康自己評価と並んで人間関係の豊かさが幸福感を高めることが明らかにされている（古谷野，1984）．前述の直井（1990）も，女性では親族交際頻度が，男性では友人交際頻度が，主観的幸福感に有意な効果を持つことを示した．

ところで，藤崎（2005）は，高齢期の社会的ネットワークの日米比較を行い，日本の高齢者の特質として，家族，親族，とりわけ子どもが中心的位置を占めることを指摘している．子どもとの関係は，高齢者の子への依存度がより大きく，また，関係の維持にあたって，対象との物理的距離が近いこと，対面接触が密に行われることが重要な要件となっている．これに対して，アメリカでは，子どもとの間にも親密な関係が維持されているが，日本の高齢者に比して，それがネットワーク全体に占める比重は小さく，むしろ友人関係が重要な位置を占めているということである．これは，アメリカ農村地域の高齢死別女性を対象としたArling（1976）の調査における，家族関係よりむしろ友人関係が主観的幸福感に影響していたという結果とも一致する．

これらの知見と上述した直井（1990）の結果を比較してみると，日本女性においては従来の日本型特質が見られるのに対して，日本男性に関してはむしろアメリカ型であるとも言えよう．また，直井の同調査では，子どもの有無や子どもとの同居の有無によって，主観的幸福感には差違がない．ここから，単に対象が近くに存在しているというだけでなく，接触の頻度やどのような交流があるかという質的な面の影響が大きいと推測される．さらに，家族の多様化を考えると，高齢者のネットワークにおいては，子どもや友人だけでなく，親族の中でもきょうだいや，あるいは隣人までをも含めていく必要性があろう．現に，高齢者の主観的幸福感の因子の一つである老いに対する態度のみに，きょうだい関係が正の規定要因とされているという報告もある（吉原，2004）．

次に，高齢者の主観的幸福感の規定因の一つとして挙げられる経済状態については，女性においてのみ経済状態が関連要因していることや（直井，1990），社会経済的地位の中でも，収入の説明力が最も大きいことが指摘されている（渡邉，2004）．

以上の先行研究は，主観的幸福感の規定要因として，とりわけ健康状態，経済状態，対人関係が重要であることを示唆するものであるが，これらの多くは首都圏の高齢者を対象としている．果たして，これらの結果は，地方の高齢者にも妥当するのであろうか．主観的幸福感の規定因の一つである対人関係については，地域差があり，特に都会と地方とでは社会的ネットワークの構造に差違が示されるのではないだろうか．そうなると，主観的幸福感への影響にも違いが出る可能性があると考えられる．

例えば，本研究の調査対象地である福井県は，①三世代同居率が高く，一般世帯の平均人員が3.14人（全国２位）と高く，②共働き世帯の割合も42.61％（全国２位）であり，③高齢者における平均寿命は長く（男女ともに全国２位），④地域交流が活発（県民の57.9％は地域の何らかの行事に参加）であり，世代別行事だけでなく，世代間交流が活発である（福井県健康長寿調査検討委員会，2005）．上記に示した４つの特性から，福井県の社会的ネットワークの特徴を推測すると，１）三世代同居率が高いので，親子間だけでなく，祖父母から孫等への文化の伝承が可能となり，世代間の交流が活性化する（①④），２）三世代同居率が高いので，次世代の嫁は子育てを親世代に任せ就労できるため，家庭内での高齢者の役割があり，孫世代との交流が盛んになる（①②），３）地域の交流が活発であることから，高齢者は親族だけでなく，高齢者同士による近隣との社会的ネットワークが構築される（③④）などが考えられる．

これは核家族化が進行する前の伝統的な社会の特色であり，特に都市化が著しい地域においては，ほぼ失われていると言えよう．一方，伝統的な生活を継承してきた当該地域においては，地域の社会的ネットワークが存続しており，また，家庭内の人間関係における接触頻度も高いと予測される．

そこで，本研究では，以上のような観点から，地方に位置する福井県における高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感の規定因について調査分析し，これまでの関東地区の高齢者に関する研究結果と比較検討することを目的とする．主観的幸福感の関連要因としては，先行研究より，調査対象者の基本属性（性別および年齢など）や家族構成，健康状態，経済状態，および対人関係を規定要因としてとり上げた．対人関係については，社会的ネットワークとして接触頻度（会う・連絡をとる頻度）についてたずねた．また，基本属性および家族構成による社会的ネットワークの差違についても併せて検討することとした．

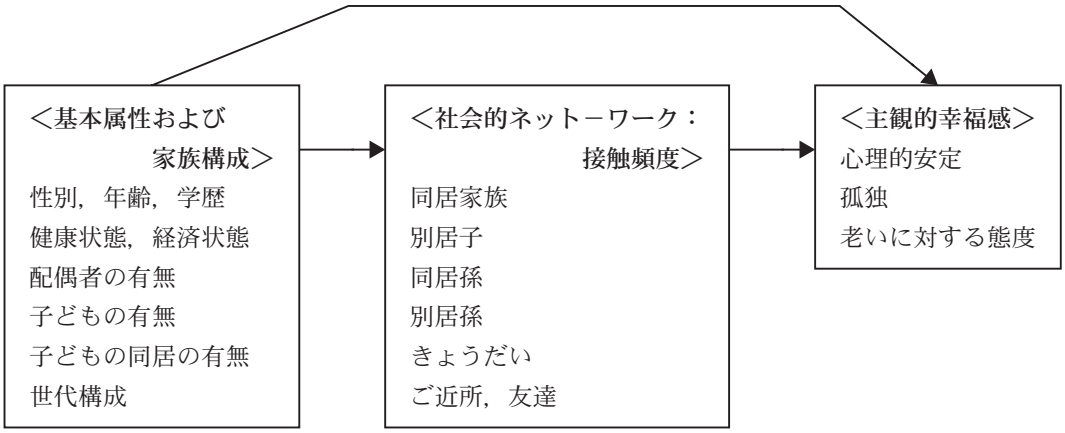

Figure１：基本属性，家族構成および社会的ネットワークが主観的幸福感に及ぼす影響

Ⅱ．方　　法

１．調査対象者

本調査では，福井県Ｅ市の18の地域の老人会に参加している高齢者が調査対象とされた．分析対象の性別の内訳は，男性70名，女性243名，合計313名だった．平均年齢は77.18歳だった(65-95)．

２．調査期間

本調査は，2007年７月下旬から９月上旬までの期間に行われた．

３．調査内容

１）主観的幸福感

高齢者の主観的幸福感を測定する尺度として，古谷野（1981）が和訳したLawtonの改訂PGCモラール・スケールが用いられた．この尺度は，Lawtonによれば心理的安定，孤独感，老いに対する態度の３因子からなる尺度である．心理的安定は６項目，孤独感は６項目，老いに対する態度は５項目の17の質問項目からなる（Table１）．回答方法は，項目によって多少表現は違うが，全て２件法だった．

Table１：主観的幸福感尺度（PGCモラール尺度）の項目

＜心理的安定＞
今年になって前よりもささいなことが気になるようになりましたか（逆）
心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか（逆）
いろいろなことを心配しますか（逆）
以前より怒ることが多くなりましたか（逆）
物事を深刻に考える方ですか（逆）
ちょっとのことでオロオロする方ですか（逆）
＜孤独＞
淋しいと感じますか（逆）
友人や親戚によく会いますか
生きていても仕方がないと思うことがありますか（逆）
悲しいことがたくさんありますか（逆）
生きることは自分にとって大変なことと思いますか（逆）
現在の生活に満足していますか
＜老いに対する態度＞
年をとるほど物事は悪くなると思いますか（逆）
去年と同じくらい元気ですか
年をとるにつれて役にたたなくなると思いますか（逆）
年をとると言うことは若い時に考えていたよりも良いと思いますか
今、若い頃と同じくらい幸せと思いますか

注）（逆）は逆転項目

２）主観的幸福感の規定要因

①性別

男性・女性の２者択一とした．

②年齢

今現在の満年齢を記述してもらった．

③健康状態

健康状態について，１．健康ではない，２．あまり健康ではない，３．まあ健康である，４．とても健康である，の４件法でたずねた．

④経済状態

経済状態は，「日々の暮らしで，経済的に困っていますか」という質問項目に対して，１．困っている，２．少し困っている，３．あまり困っていない，４．困っていない，の４件法で回答を求めた．

⑤学歴

最後に卒業した学校について記述してもらった．

⑥配偶者の有無

配偶者の有無について，１．いる，２．いない，の２件法でたずねた．

⑦子どもの有無

子どもの有無について，１．いる，２．いない，の２件法でたずねた．

⑧既婚・未婚の子どもとの同居

同居している家族について，選択肢から選んでもらった．

⑨世帯構成

同居している家族の項目から判断し，１．独居，２．夫婦二人暮らし，３．二世代家族（子どもと同居），４．三世代家族，５．四世代家族，６．その他，に分類した．

⑩社会的ネットワーク

社会的ネットワークについては，一緒に暮らしている家族（以後，同居家族），一緒に暮らしていないお子さん（以後，別居子），一緒に暮らしているお孫さん（以後，同居孫），一緒に暮らしていないお孫さん（別居孫），あなたのきょうだい（以後，兄弟姉妹），ご近所さん（以後，ご近所），あなたの友達（以後，友達），について，会う・連絡をとる頻度をたずねた．回答方法は，７．ほとんど毎日，６．週に３－４回ぐらい，５．週に１－２回ぐらい，４．月に１－２回ぐらい，３．年に数回，２．ほとんどない，１．全くない，の７件法だった．

４．調査手続き

本調査では，Ｅ市役所の協力のもと，18の老人会の会合に参加し，集団法で行われた．被調査者は，与えられた質問紙に対して各個人のペースで回答を行った．その際，被調査者は質問項目の意味が分かりにくい場合には，逐一調査者に相談した．また，調査者は，被調査者が回答するのに困難であると判断した場合，調査は中止した．

Ⅲ．結　　果

１．基本属性および家族構成別にみた社会的ネットワーク

調査対象者の基本属性，家族構成，および社会的ネットワークを Table２～４に示した．

１）基本属性別に検討した社会的ネットワーク

社会的ネットワークとして，同居家族，別居子，同居孫，別居孫，兄弟姉妹，ご近所，および友達との接触頻度を取り上げ検討した．

①性別

男女間で社会的ネットワークについてノンパラメトリック分析（Mann-Whitney 検定）を行った結果，同居家族，兄弟姉妹，ご近所，友達との接触頻度において有意差がみられた

Table２：調査対象者の基本属性（N＝313）

	人数（%）
性別	
男性	70（22.4）
女性	243（77.6）
年齢	
前期高齢者（65-75）	103（32.9）
後期高齢者（75-84）	174（55.6）
超高齢者（85-）	36（11.5）
健康状態	
健康ではない	17（5.4）
あまり健康ではない	64（20.4）
まあ健康である	180（57.5）
とても健康である	48（15.3）
不明	4（1.3）
経済状態	
困っている	12（3.8）
少し困っている	39（12.5）
あまり困っていない	88（28.1）
困っていない	168（53.7）
不明	6（1.9）
学歴	
初等教育	72（23.0）
中等教育	138（44.1）
高等教育	73（23.3）
不明	30（9.6）

Table３：調査対象者の家族構成（N＝313）

	人数（%）
配偶者の有無	
いる	159（50.8）
いない	131（41.9）
不明	23（7.3）
子どもの有無	
いる	296（94.6）
いない	13（4.2）
不明	4（1.3）
既婚子との同居	
いる	151（48.2）
いない	151（48.2）
不明	11（3.5）
未婚子との同居	
いる	37（11.8）
いない	265（84.7）
不明	11（3.5）
世帯構成	
独居	42（13.4）
夫婦のみ	51（16.3）
二世代家族	57（18.2）
三世代家族	131（41.9）
四世代家族	20（6.4）
その他	7（2.2）
不明	5（1.6）

（同居家族：$z=2.34$，$p<.05$；兄弟姉妹：$z=3.42$，$p<.01$；ご近所：$z=2.68$，$p<.01$；友達：$z=3.32$，$p<.01$）．また，同居孫において傾向差がみられた（$z=1.70$，$p<.10$）．全てにおいて，女性の接触頻度は，男性の接触頻度より高かった．

②年齢

65～74歳を前期高齢者，75～84歳を後期高齢者，85歳以上を超高齢者とし，３群間で社会的ネットワークについてノンパラメトリック分析（Kruskal Wallis 検定）を行った結果，いずれにおいても有意差はみられなかった．

③健康状態

「１．健康ではない」，「２．あまり健康ではない」，「３．まあ健康である」，「４．とても健康である」の４群間で，社会的ネットワークについてノンパラメトリック分析（Kruskal Wallis 検定）を行った．その結果，友達との接触頻度において有意差が，兄弟姉妹およびご近所において傾向差がみられた．（友達：$x^2=8.01$，$df=3$，$p<.05$；兄弟姉妹：$x^2=7.55$，$df=3$，$p<.10$；ご近所：$x^2=7.62$，$df=3$，$p<.10$）．下位検定（Mann-Whitney 検定）の結果，４群は２・３群より有意に接触頻度が高いことがわかった．

④経済状態

Table４：調査対象者の社会的ネットワーク（N＝313）

	人数（%）
同居家族	
ほとんど毎日	235（75.1）
週に３-４回ぐらい	5（1.6）
週に１-２回ぐらい	0（ 0）
月に１-２回ぐらい	2（0.6）
年に数回	1（0.3）
ほとんどない	1（0.3）
全くない	42（13.4）
不明	27（8.6）
別居子	
ほとんど毎日	34（10.9）
週に３-４回ぐらい	19（6.1）
週に１-２回ぐらい	39（12.5）
月に１-２回ぐらい	74（23.6）
年に数回	70（22.4）
ほとんどない	4（1.3）
全くない	17（5.4）
不明	56（17.9）
同居孫	
ほとんど毎日	121（38.7）
週に３-４回ぐらい	11（3.5）
週に１-２回ぐらい	5（1.6）
月に１-２回ぐらい	2（0.6）
年に数回	6（1.9）
ほとんどない	0（ 0）
全くない	97（31.0）
不明	71（22.7）
別居孫	
ほとんど毎日	12（3.8）
週に３-４回ぐらい	5（1.6）
週に１-２回ぐらい	26（8.3）
月に１-２回ぐらい	48（15.3）
年に数回	108（34.5）
ほとんどない	23（7.3）
全くない	21（6.7）
不明	70（22.4）

	人数（%）
兄弟姉妹	
ほとんど毎日	8（2.6）
週に３-４回ぐらい	11（3.5）
週に１-２回ぐらい	21（6.7）
月に１-２回ぐらい	87（27.8）
年に数回	92（29.4）
ほとんどない	11（3.5）
全くない	5（1.6）
不明	78（24.9）
ご近所	
ほとんど毎日	170（54.3）
週に３-４回ぐらい	46（14.7）
週に１-２回ぐらい	30（9.6）
月に１-２回ぐらい	15（4.8）
年に数回	2（0.6）
ほとんどない	9（2.9）
全くない	5（1.6）
不明	36（11.5）
友達	
ほとんど毎日	75（24.0）
週に３-４回ぐらい	36（11.5）
週に１-２回ぐらい	58（18.5）
月に１-２回ぐらい	48（15.3）
年に数回	39（12.5）
ほとんどない	11（3.5）
全くない	8（2.6）
不明	38（12.1）

経済状態に関する，「１．困っている」，「２．少し困っている」，「３．あまり困っていない」，「４．困っていない」の４群間で，社会的ネットワークについてノンパラメトリック分析（Kruskal Wallis 検定）を行った．その結果，同居孫との接触頻度において有意差がみられた（x^2＝9.44，df＝3，p＜.05）．下位検定の結果，４群は２群より同居孫との接触頻度が高いことが明らかになった．

⑤学歴

卒業した学校について記述してもらった結果をもとに，「１．初等教育」，「２．中等教育」，「３．高等教育」の３群に分類した．高齢者の学歴については，教育制度が時代によって大きく変化しているため，現代の教育制度に当てはめることは困難であったが，就業年数等を勘案しできるだけ現行の教育制度に近い群に分類した．３群間で社会的ネットワークについてノンパラメトリック分析（Kruskal Wallis 検定）を行った結果，別居子と友達との接触頻度において傾向差がみられ（別居子：x^2＝5.46，df＝2，p＜.10；友達：x^2＝5.90，df＝2，p＜.10），３群の接触頻度は２群より高い傾向であることが明らかになった．

２）家族構成別に検討した主観的幸福感

家族構成により，社会的ネットワークの種類は大きく変わってくる．例えば，子どものいない高齢者では，子や孫との接触頻度を回答することは出来ない．そこで，家族構成別に社会的ネットワークを検討する場合には，同居家族，別居子，同居孫，別居孫，兄弟姉妹，ご近所，および友達との接触頻度の中で比較可能な項目を選択して分析を実施した．

①配偶者の有無

配偶者の有無によって，社会的ネットワーク（同居家族，別居子，同居孫，別居孫，兄弟姉妹，ご近所，および友達との接触頻度）についてノンパラメトリック分析（Mann-Whitney 検定）を行った結果，同居家族との接触頻度において有意差がみられた（z＝5.80，p＜.001）．配偶者がいる者は，いない者より同居家族との接触頻度が高かった．

②子どもの有無

子どもの有無によって，社会的ネットワーク（同居家族，兄弟姉妹，ご近所，友達）についてノンパラメトリック分析（Mann-Whitney 検定）を行った結果，同居家族との接触頻度において有意差がみられた（z＝2.31，p＜.05）．子どもがいる者は，いない者より同居家族との接触頻度が高かった．

③既婚・未婚の子どもとの同居の有無

既婚および未婚の子どもとの同居の有無によって，社会的ネットワーク（同居家族，別居子，別居孫，兄弟姉妹，ご近所，友達）についてノンパラメトリック分析（Mann-Whitney 検定）を行った．その結果，既婚子との同居では，同居家族と同居孫との接触頻度において有意差がみられた（同居家族：z＝6.32，p＜.001；同居孫：z＝11.15，p＜.001）．また，未婚子との同居では，同居家族との接触頻度においてのみ有意差がみられた（z＝2.80，p＜.01）．子どもと同居している者は，いない者より同居家族との接触頻度が高かった．

④世帯構成

同居している家族の項目から判断し，「１．独居」，「２．夫婦二人暮らし」，「３．二世代家族（子どもと同居）」，「４．三世代家族以上」，の４群に分類し，社会的ネットワーク（別居子，別居孫，兄弟姉妹，ご近所，友達）についてノンパラメトリック分析（Mann-Whitney 検定）を行った．その結果，いずれにおいても有意差は示されなかった．

２．基本属性，家族構成および社会的ネットワークが主観的幸福感に及ぼす影響

１）基本属性別に検討した主観的幸福感

PCG モラール尺度を構成する17項目の合計得点を「主観的幸福感」得点とした．そして，PCG モラールを構成する３つの下位尺度の合計点を算出し，各々「心理的安定」，「孤独感」，「老いに対する態度」とした．

①性別

男女間で主観的幸福感，心理的安定，孤独感，および老いに対する態度について平均値の差の検定を行った結果，全てにおいて有意差は示されなかった．

②年齢

65～74歳を前期高齢者，75～84歳を後期高齢者，85歳以上を超高齢者とし，３群間で性別と同様に４変数について一元配置の分散分析を行った結果，いずれにおいても有意差はみられなかった．

③健康状態

上述した４群間で同様に４変数について一元配置の分散分析を行った結果，全てに有意差が認められた（主観的幸福感：$F(3, 258)=11.85$，$p<.001$；心理的安定：$F(3, 258)=5.29$，$p<.01$；孤独：$F(3, 258)=7.60$，$p<.001$；老いに対する態度：$F(3, 258)=9.42$，$p<.001$）．下位検定（Tukey 法）を行った結果，「主観的幸福感」および「老いに対する態度」については，４群が他の群より有意に得点が高いことがわかった．「心的安定」に関しては，３・４群が２群より有意に得点が高く，心理的に安定していることがわかった．さらに，「孤独」では，４群が１・２群より，また，３群が２群より有意に得点が高いことが明らかになった．つまり，４群は１・２群より，３群は２群より孤独感が低いと言える．

④経済状態

上述した４群間で４変数について一元配置の分散分析を行った．その結果，「主観的幸福感」および「孤独」に有意差が（$F(3, 255)=4.19$，$p<.01$；$F(3, 255)=6.68$，$p<.001$），「心理的安定」については傾向差が示された（$F(3, 255)=2.61$，$p<.10$）．下位検定の結果，「主観的幸福感」では４群が２群より，「孤独」では４群が１・２群より有意に得点が高かった．つまり，４群は２群より主観的幸福感が高く，４群は１・２群より孤独感が低い．また，「心理的安定」においては，４群が２群より高い傾向であることがわかった．

⑤学歴

上述した３群間で４変数について一元配置の分散分析を行った結果，「主観的幸福感」および「孤独」において有意差が示された（$F(2, 236)=4.89$，$p<.01$；$F(2, 236)=5.24$，$p<.01$）．下位検定の結果，両者とも，３群が１・２群より有意に得点が高かった．つまり，３群は１・２群より主観的幸福感が高く，孤独感が低かった．

２）家族構成別に検討した主観的幸福感

①配偶者の有無

配偶者の有無によって，主観的幸福感，心理的安定，孤独感，および老いに対する態度について，平均値の差の検定を行った結果，「孤独」においてのみ有意差が示され，配偶者がいる者は，いない者より得点が高かった（$t(232)=2.10$, $p<.05$）．つまり，配偶者がいる者は，いない者より孤独感が低いことがわかった．

②子どもの有無

子どもの有無によって，４変数について平均値の差の検定を行った結果，「心理的安定」においてのみ有意差が示され，子どもがいる者は，いない者より得点が有意に高かった（$t(259)=2.03$, $p<.05$）.

③既婚・未婚の子どもとの同居の有無

既婚および未婚の子どもとの同居の有無によって，４変数について平均値の差の検定の行った結果，いずれにおいても子どもの同居によって有意差は示されなかった.

④世帯構成

同居している家族の項目から判断し，「１．独居」，「２．夫婦二人暮らし」，「３．二世代家族（子どもと同居）」，「４．三世代家族以上」の４群に分類し，４変数について一元配置の分散分析を行った．その結果，世帯構成による差は示されなかった.

３）社会的ネットワークと主観的幸福感

接触頻度により，「ほとんど毎日」，「週に３－４回ぐらい」，「週に１－２回ぐらい」を「１．高接触群」，「月に１－２回ぐらい」を「２．中接触群」，「年に数回」，「ほとんどない」，「全くない」を「３．低接触群」とした．そして，項目ごとに接触頻度（高・中・低）によって，主観的幸福感，心理的安定，孤独感，および老いに対する態度について一元配置の分散分析を行った．その際，同居家族および同居孫については，頻度にも偏りがあるため分析から除外した．まず，別居孫との接触頻度によって，孤独の得点に有意差が示され，下位検定の結果，高接触群は低接触群より有意に高かった（$F(2,204)=3.55$, $p<.05$）．つまり，高接触頻群は低接触群より，孤独感が低かった．また，別居子との接触頻度によって，主観的幸福感と心理的安定にに傾向差が示された（$F(2,216)=2.78$, $p<.10$；$F(2,216)=2.62$, $p<.10$）．その他の対象との接触頻度と主観的幸福感の４変数との間には，有意な差はみられなかった.

４）主観的幸福感の規定因の検討

まず，高齢者全体を対象とした主観的幸福感の規定因を検討するために，年齢，健康状態（ダミー変数1-4），経済状態（ダミー変数1-4），学歴（ダミー変数1-3），配偶者の有無（ダミー変数0-1），既婚・未婚の子どもとの同居の有無（ダミー変数0-1），および社会的ネットワーク（別居子，別居孫，ご近所，友達との接触頻度）（ダミー変数1-7）を独立変数としたステップワイ

Table ５：主観的幸福感の規定因

	主観的幸福感		
	全体	男性	女性
年齢			
健康状態	.216**	.402*	.179*
経済状態			.200*
学歴	.178*		.207*
配偶者の有無			
既婚子との同居の有無			
未婚子との同居の有無			
別居子との接触頻度			
別居孫との接触頻度			
ご近所との接触頻度		.367*	
友達との接触頻度			
R^2	.09	.26	.12

有意水準：*$p<.05$，**$p<.01$

ズ法による重回帰分析を行った（Table５）．その結果，高齢者全体では，健康状態と学歴が主観的幸福感に正の影響を及ぼしていることがわかった．次に，これまでの研究から主観的幸福感に影響を与える要因については，男女差があると指摘されているので（直井，2004），本研究においても男女別に重回帰分析を実施した．その結果，男性では健康状態と近所との接触頻度が，主観的幸福感に正の影響を及ぼし，女性では健康状態・学歴・経済状態が，主観的幸福感に正の影響を及ぼしていることが明らかになった．

Ⅳ．考　察

１．基本属性および家族構成別にみた社会的ネットワーク

まず，基本属性と社会的ネットワークとの関連について分析した結果，女性は男性より，同居家族，兄弟姉妹，ご近所，および友達との接触頻度が高いことが明らかになった．Gilligan（1982）は，女性は他者との関係の中で，自己や道徳観を獲得すると指摘している．また，Golombok＆Fivush（2005）によれば，女性は男性と比べ，より深い，より親密な交友関係を持ち，個人的な問題や感情についての話題が多いとのことである．これらは，決して生物学的な差ではなく，このような女性の関係への関心と能力の高さは，女性が生涯を通じて，何世代もかけて関係の変化に適応し，文脈の中で自分を再定義し続ける必要があったゆえに獲得してきた能力であると考えられる（平木，2007）．本研究においても，女性高齢者は，男性高齢者より，親族の如何を問わず他者との関係性が高いことが示され，先行研究が裏付けられた．

年齢による社会的ネットワークの差異はなかった．本研究では，年齢の横断的比較であるが，高齢者の社会的ネットワークの経年的変化を検討した斉藤（2008）においても同様の結果が示されている．斉藤は，日本全国の60歳以上の高齢者から抽出されたサンプルを対象として，1987年，1990年，1993年の３時点での社会的ネットワークについて縦断的に検討した結果，高齢者全体では同居人の人数は減少傾向にあるが，加齢に伴う交流の減少はなく，むしろ友人などとの交流頻度では増加傾向にあることが確認されている．

健康状態別に社会的ネットワークについて検討した結果，健康状態が良好である高齢者の方が，友達との接触頻度が高く，兄弟姉妹やご近所との接触頻度も高いことが明らかとなった．また，経済状態が良い高齢者の方が，同居している孫との接触頻度が高く，学歴が高い高齢者において，別居している子どもや友達との接触頻度が高いことが示された．

つまり，先行研究が指摘するように（Antonucci，1990），社会的ネットワークは，全ての高齢者において加齢とともに平均的に縮小するのではなく，地域の如何を問わず，むしろ加齢とともに変化する健康状態や社会経済的地位などの影響の方が大きいことが本研究によっても示唆された．

次に，家族構成と社会的ネットワークとの関連について分析した結果，配偶者の有無，子どもの有無，および既婚・未婚子との同居の有無は，いずれも同居家族との接触頻度にのみ差異が示された．また，世帯構成による社会的ネットワークについては，差異はなかった．社会的ネットワークに同居家族を含めると，当然ながら世帯によるネットワークの差異があるが（赤澤ら，2008），同居家族以外には差異はない．つまり，世帯構成の縮小化に伴い，同居家族以外の友達やご近所という人間関係は，必ずしも家族の代替機能を果たすほどには増加しないが，維持されていることが示唆された．特に，先の齋藤（2008）では，友人・近隣・親戚との交流頻度は，１週間に２

回以上と回答した者が30％前後であったが，本研究の対象者では，平均して約50％となっている．つまり，本研究対象者におけるご近所や友人との交流頻度は，かなり高い．これは，地域交流が活発であるという本県の特徴を反映していると言えよう．すなわち，当該地域においては，高齢者同志による近隣との社会的ネットワークが構築されていることが実証された。

２．基本属性，家族構成および社会的ネットワークが主観的幸福感に及ぼす影響

まず，基本属性と主観的幸福感，心理的安定，孤独感，および老いに対する態度との関連について検討した結果，男女差は見られなかった．従前の日本での調査では，女性の方が男性より主観的幸福感が低い傾向がどの調査でも見られたとのことであるが（直井，2004），本研究ではそのような結果は示されなかった．男女差が生じる要因は，今後の検討課題とされているが，その要因の検討こそ，都市部と地方の高齢者との違いを表す要因であるかもしれない．健康状態に関しては，良好な高齢者の主観的幸福感や心理的安定度が高く，孤独感は低く，老いに対する態度も肯定的であった．さらに，経済状態が良好な高齢者や，学歴が高い高齢者は，そうでない高齢者より，主観的幸福感が高く，孤独感が低い．健康状態については，従来の国内の研究でも，主観的幸福感を予測する重要な要因と位置づけられている．そして，欧米の主観的幸福感の関連要因の研究を文献検討した渡邉（2004）らは，健康と社会経済的地位を重要な要因としてとり上げているが，本研究においても，同様の結果が示されたことにより，国や地域の如何を問わず，健康状態や社会経済的地位が，高齢者の主観的幸福感に大きく影響することが示唆された．

次に，家族構成別に主観的幸福感について検討した結果，配偶者がいる者は，いない者より孤独感が低かった．また，子どもがいる者は，いない者より心理的安定度が高かった．しかし，既婚・未婚の子どもとの同居の有無や世帯構成による差異はなかった．配偶者の有無に関しては，先行研究においても主観的幸福感との関連が示されており，本研究の結果と合致する（古谷野ら，1995；直井，2004）．しかし，子どもの有無については，直井（2004）では差がなかったが，本研究では差が示された．また，既婚同居子の有無については，古谷野ら（1995）では主観的幸福感との間に関連があったが，本研究では関連は示されなかった．本研究が行われた地域では，三世代同居率が高く，高齢者にとって次世代への関心が非常に高いと推測される．また，家の存続についても，古い規範が残っていると考えられる．このため都市部の高齢者以上に，子の有無が高齢者の主観的幸福感に影響を与えたとも考えられる．その一方で，既婚同居子の有無と主観的幸福感との関連はなかったが，これも同居率の高さと関連する可能性がある．同居率が高いことにより，家族からのサポートを受けられるという恩恵がある一方で，世代間のトラブルもまた生じやすい側面がある．それ故，上記のような矛盾した結果が示されたのではないか．しかし，本研究の対象者の多くが子どもを持っており，子どものいない高齢者は少数であった．加えて，比較した先行研究とは，地域だけでなく，対象者の年齢などにも違いがあるため，安易には比較できない．よって，今後さらなる検討を行い，都市部と地方の高齢者の特性の差異を明らかにしていきたい．

最後に，社会的ネットワークと主観的幸福感との関係については，別居孫との接触頻度が高い高齢者においては，接触頻度が低い高齢者より孤独感が低いことがわかった．社会的ネットワークについては，親族の差異しか示されず，友人関係やご近所といった関係による主観的幸福感の差異は見られなかった．上述のように，日本の高齢者の社会的ネットワークの特質として，家族，親族，とりわけ子どもとの関係が中心的な位置を占め，対面接触が密に行われることが重要な要

件となっていることが（藤崎，2005），主観的幸福感に影響していると考えられる．

１）主観的幸福感の規定因の検討

高齢者全体を対象とした主観的幸福感の規定因を検討した結果，高齢者全体では，健康状態と学歴が高いほど主観的幸福感が高まり，男女別にみると，男性では健康状態と近所との接触頻度が高いほど，主観的幸福感が高まっていた．女性では健康状態・学歴・経済状態が高いほど，主観的幸福感が高いことが明らかになった．健康状態については，先述の通り，国や地域の如何を問わず主観的幸福感との関連の高さが指摘されている．また，学歴については，欧米の研究を文献検討した渡邉（2004）らは，主観的幸福感との関連を指摘するものの，これまでの国内の研究では，学歴が直接的に主観的幸福感を高めるという結果は少ない．次の男女別の検討結果をみると，女性においてのみ学歴の効果が示され，全体の分析で学歴の影響が示されたのは，本研究の調査対象者が，男性より女性の方が多いことによるものと考えられる．男女別の規定因の結果を，直井（2004）と比較してみると，ほぼ一致している．要するに，男性高齢者では，健康状態と家族以外との交際が，一方，女性高齢者では健康状態と経済状態が主観的幸福感に影響を与えることは，地域の如何を問わず共通していることが示唆された．

非常に興味深いのは，近隣との接触頻度が，男性は女性より低いにもかかわらず，主観的幸福感の規定因となっていることである．これは，男性高齢者においては，いったん仕事を退職した後に，地域などで様々な役割を引き受けることにより，親族だけでなく，高齢者同士による近隣との社会的ネットワークが構築される可能性が高いことが背景にあるのかもしれない．また，本研究のもう一つの特徴として，女性高齢者における学歴の効果が挙げられよう．この学歴がもたらす効果については，規定因間の関連についても分析し，今後さらなる検討を加えていきたいと考えている．

註：本研究は，平成18年度ジェロントロジー研究の助成を受けて行われた．

謝　辞

本研究の調査にあたって協力をいただいた越前市の老人会の皆様，調査の段取りをしてくださった越前市役所の方々に感謝申し上げます．また，本研究の分析に当たり，2007年度卒業論文「高齢者のきょうだい関係と主観的幸福感」を作成した明治宏一さんのデータを使用しました．心よりお礼申し上げます．

参考文献

赤澤淳子・水上喜美子・岩淵千明　「高齢者の日常生活の役割意識に関する検討(3)－社会的ネットワークと役割意識との関係」『日本発達心理学会第19回大会論文集』，783，2008.

Antonucci, T.C. *Social supports and social relationships.* In handbook of aging and the social sciences, 3rd ed. by Binstock R,George L., 205-226, Academic Press, San Diego, 1990.

Arling, G. The elderly widow and her family, neighbors and friends, *Journal of Marriage and the Family,* **38**, 757-768, 1976.

藤崎宏子　『高齢者・家族・社会的ネットワーク』　培風館，11-52，2005.

古谷野亘　「生きがいの測定－改訂 PGC モラール・スケールの分析－」『老年社会学』，**3**，83-95，1981.

Gilligan, C. *In a Different Voice:Psychological Theory and Women´s Development.* Harvard University Press:Cambridge, 1982.（生田久美子・並木美智子共訳　『もうひとつの声』　川島書店, 1986.）

Golombok, S. & Fivush, R. *Gender Development.* Cambridge University Press, 2005.（小林芳郎・瀧野揚三訳　『ジェンダーの発達心理学』　田研出版, 2005.）

平木典子　「女性心理臨床家に今, 必要なもの(1)」『女性の発達臨床心理学』, 17-24, 2007.

古谷野亘　「主観的幸福感の測定と要因分析－尺度の選択が要因分析におよぼす影響について－」『社会老年学』, **20**, 59-64, 1984.

古谷野亘　「QOL 等を測定するための測度(2)」『老年精神医学雑誌』, **7**(4), 431-441, 1996.

古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子　「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」『老年社会科学』, **16**(2), 115-124, 1995.

Lawton, M.P. The Philadelphia Geriatric Center Moral Scales:A Revision. *Journal of Gerontology,* **30**, 85-89, 1975.

前田大作・浅野仁・谷口和江　「老人の主観的幸福感の研究－モラール・スケールによる測定の試み－」『社会老年学』, **11**, 15-31, 1979.

森岡清志　『都市社会の人間関係』　放送大学教育振興会, 2000.

直井道子　「都市居住高齢者の幸福感－家族・親族・友人の果たす役割」『総合都市研究』, **39**, 149-159, 1990.

直井道子　『幸福に老いるために』　勁草書房, 2004.

斉藤雅茂　「高齢者の社会的ネットワークの経年的変化－６年間のパネルデータを用いた潜在成長曲線モデルより－」『老年社会科学』, **29**(4), 516-525, 2008.

渡邉敏恵・山崎喜比古　「幸福な老いの用件とは－高齢者の主観的ウェルビーイングに関連する要因の文献検討－」『埼玉県立大学紀要』, **6**, 75-86, 2004.

吉原千賀　「高齢者の主観的幸福感ときょうだい関係」『奈良女子大学社会学論集』, **11**, 73-87, 2004.